ア文学集・30

日本プロレタリア文学集・30

細田民樹、貴司山治 集

細田民樹、貴司山治 集

日本プロレタリア文学集・30
細田民樹、貴司山治集
定価　二八〇〇円
一九八七年七月三十日　初版©
発行者　山本　功
発行所　株式会社　新日本出版社
〒151 東京都渋谷区千駄ケ谷四の二五の六
電話（〇三）四二三—八四〇一（営業）
（〇三）四二三—九三二三（編集）
振替番号　東京三—一三六八一
印刷所　光陽印刷株式会社
製本所　みさと製本印刷株式会社
第二十七回配本

落丁・乱丁本がありましたらおとりかえいたします。
本書の内容の一部または全体を無断で複写複製（コピー）して配布することは，法律で認められた場合を除き，著作者および出版社の権利の侵害になります．小社あて事前に承諾をお求めください．

ISBN4-406-01531-0 C0393

日本プロレタリア文学集・30

細田民樹、貴司山治集

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

目次

細田民樹
真理の春……七
貴司山治
バス車掌七百人……二三七
ハンスト……二五八
八島製薬工場……二七三
仲秋名月……二八三
ゴー・ストップ……二九七
解説……小林茂夫……四二三
発表年月日と掲載文献……四五五

細
田
民
樹

真理の春

縛られる

一

栢山容作は、会社へ、ズボンの月賦を取りに来た知り合いの洋服屋と、尾張町で別れ、別れてから、森永で子供のビスケットを三十銭買うと、元の場所へ返って、青バスにもぐりこんだ。

「来たよ、お父ちゃん、ブー、ブー来た、来た。」

市枝に指ざされて、バスをおりた父親をやっと認めた進は、自分の発見を喜ぶように、同じカタ言をくりかえしながら、母の手を引っぱって、容作のそばに寄って来た。

「坊や、お土産。」と彼はだるい笑顔で、白い毛糸の頭巾を撫でてやった。

「お郷里からイセエビが来ましたわ。いいエビよ、今夜フライね……。」

「ほう、まだ禁漁期じゃないかしら。」

彼の頭に、郷里の青い荒浜で、海獣のようにひょこひょこと、波にもまれているエビの生舟が浮かんですぐ消えた。……エビフライに酒——酒はこの間、進の誕生日にとったのが、まだあると思った。

「洋服屋さん、会社へ行きませんでした？　行くとはいわなかったけれど。」

「来たよ。四円だけやっといた。銀座でコーヒーを一杯のんでね。」

通勤の都合をいえば、この次の大木戸でおりた方が、二丁も家に近かった。しかし、次まで乗るとバスは三区になった。往復十四銭の差は、今の容作にとって、小さいことではなかった。で、いつもここから乗ることにきめていた。子供もやっと歩ける頃になったので、歩行の練習とおんもの喜びをかね、市枝はなるたけ進の手を引いて、夕方容作

を迎えに出た。子供を歩かせるにも混雑する次の停留場より、こちらの方が気を許せた。
「手を放してごらん、泣くかな。」
「いえ、こんな道のいい所は大丈夫よ。」
しかし、手を放すと、男の子はどたどたと走りだそうとするので、市枝は笑って足早に小ごしをかがめ、蜜柑色の小さなスエターを背後から握った。
「少しゃ転んだっていいさ。」
「でも、潔癖なんですか、手に泥がつくと、そりゃあ泣くの。」と彼女は子供に、真中のいい所を歩かせ、自分は土くれのごそごそしたわだちのあとを踏みながら、「有難い時候になったわ。雪解け、もう大分楽になったわね。」
途中、ワンワンやコケコッコや豆腐屋のプープーに会い、六丁ばかりの道を、二十分もかかって家に帰った。
市枝はぴりぴりしたイセエビの身を、笊にあげて容作に見せ、パン粉をまぶって、油の鍋にガスを点けた。普段着に寛いだ彼は鍋が危いので、こちらの部屋へ子供を抱いて来て、机の上にラケット型のビスケットを並べ、自分はバットをふかしていた。
その時である。容作は急に身近で、だ、だ、だ、だっと、地底の震える異様な（異様な！）物音を感じた。地震かな、……彼はまだ学生の時分、上野図書館で、大震災の一秒前、あの恐ろしい予音を聞いて以来、地震には実に敏感になった。……
「おい、地震だ、大きいぞ……。」
お勝手に声をかけ、子供を抱いて立ち上ろうとした瞬間、ものすごい音で、玄関の格子が蹴倒された。続いてあいの襖がはねとばされ、まるで黒潮のおそうように、十人余りの興奮しきった男が、どやどやと走りこんだ。男達はあおざめたまま、ものもいわず、いきなり容作にしがみつき、彼の手を両方から大の字にねじ伏せた……。ちらとピストルの光った一隊は、二階に駆け上る……。
容作には、むろん、何が何だか——、唯、火のつくように泣きだした子供の声だけが、ちょっと意識せられた……。
市枝はあっけにとられた。鍋のガスを消すことも忘れて、頭では何だか、どろぼうでないと感じながら、口では危急な場合の本能か、
「どろぼう！　どろぼう！」とお勝手で、激しく彼女は叫びだした。

二

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

容作は、すぐ何か怒り叫ぼうとしても、ドキつく心臓に圧迫せられて、瞬間、口がきけなかった。

「……あなたがたは……何です……」

彼の頭の上には、極度の興奮と恐怖で、紙のように鼻白んだ数個の顔が、気味わるい眼光を射おとしていた。彼の右手にしがみついた男の腕が、ひどく震えている。容作は、やっと一言訊き返せた時、だが、彼等が何であるか、意識の下でほの暗く、ちょっと了解した気がした。

「何でもいいんだ。あとで解る。」

怒鳴りちらした一人が、お勝手で『どろぼう』と叫んでいる市枝を引っ捕えてきて、容作の前でおさえつけた。

上総屋という法被を着て、容作にかじりついていた男が、掌に捕縄をまるめ、今一人と、いきなり彼を縛ろうとした。

「……な……なにをする？　僕はいやだ。僕に何の罪があるんです？　僕に何の罪が……」

容作はぞっと、あらゆる脊椎骨で、それを拒みながら、火のつくような、すっかり変色した声だった。

すると、そばに突っ立った背広の男が、何やら法被に言葉をかけた。大分上役らしいその男には、さすがに第何感とやらで、容作に案外手ごたえのないことが解ったのか、着物の上から亀の子に縛ることはさせなかった。容作はみぞおちから捕縄をいれられ、両方の股と脛を二個所ずつ辛うじて歩行の出来るくらいに縛られた。

走りだせない代りに、着物の上からは、捕縛せられているようには見えなかった。これが、この国の法律に、少しも触れていない彼を、『紳士待遇』にした最初であった。

容作の妻と子供が、彼にとりすがって、狂人のように泣き叫び、市枝は思わず、その男達を罵るので、一人が序に、彼女に縄をかけようとした。

「ワイフは……待って下さい。ワイフを縛られたら、この子の乳は、どうなります。」

「幾つだ。」と法被が眼を鋭くした。

「三つになったばかりです。」

子供がもう少し大きければ、女房も必ず縛るのだ。――明かに法被は、そういう意気込みで訊いたのだ。

始めてこんな目にあう容作は、かつてない興奮のうちに、日頃とまるで違った疳高い声で、自分が断じて捕縛せられるわけのないことを、空しく、ひとしきり弁明した。

「だって房森は、僕の中学時代の同窓です。あれがロシアに行ってたことも、何か無産運動をしてたことも僕は知っています。僕は今の会社に出るまで、二年半も失業していましたから、新聞に広告して、二階を間貸ししたくらいで

す。そんな矢先に、間代は出すから、暫くおいてくれといった房森を、僕は友誼としても、断るわけがないのです。しかし房森は先月の始め大阪に就職口がみつかったといって発ちました。そのあとへ房森の紹介で、今の麻口君が来られたのです。麻口君は、本所の鋳物工場に勤めている至極善良な人ですから、無論そんな……」

「よしたまえ！　ここで聞いたって、仕方がないよ。まあ、とにかく、一度来てもらえば解る。」

背広の上役は、容作の一生懸命な弁解にも拘らず、しかし、慰め口調で、一向張りあいなく受けながした。

この時二階から、容作とは違って着物の上で、がんじがらみに縛られた麻口が、土色の顔をしておりて来た。彼はかなり抵抗したらしく、老人のような小さな額から、血が流れていた。

市枝は、ものもろくに言わない静かな麻口がどういうわけで、……と驚いて、また、ぞっと震え上った。

三

市枝が、もし、こんなことに馴れた社会運動家の細君だったなら、これほど驚きあわてはしなかったろう。だが、彼女は、突然引ったてられてゆく容作に、散紙やがま口を持たせることすら気づかず、抱いた子供と一緒におびえ泣きながら、ひたすら役人達に哀訴した。

「……そ……それに、お恥かしいことですけど、主人は長い間失業してまして、この頃やっと職についたばかりです。……どうぞ、ここでよくお調べなすって下さい。……連れて行かないで下さい。……連れて行かれたら、家の生活はほんとに、……子供と私は、明日からほんとに……」

「奥さん、しらばくれるとためにならんよ。あんただって、まんざら知らんことでもあるまい。」

彼女の哀訴を期待していた背広が、ちょっとせせら笑って、

「さあ、出た、出た。」と容作を肩の背後から小突いた。

紺絣の上にぐるぐると縄のかかった麻口がさきに、その後から、一見縛られているとは見えない容作が、土間におろされた。興奮しきって、今まで夢中で弁明していた容作も、突差に、それが空しい努力だと解ったのか、震えのやまない下唇を、ぐっと噛んで黙った。

「お父ちゃん、行っちゃいや、行っちゃいやよオ……」

三つになったばかりの子供に、どうしてこれほど、恐怖の深い本能があるのか、進も気狂いのように泣きつのった。

「会社の方は、岩木さんに、」と容作は、顔中涙だらけの妻に、最後にいった。「僕は何でもないんだから、何でもないんだからね、すぐ帰るといっといてくれ、……それから、進に風邪を……。」

「ええ、すぐ帰ってね、……私、すぐ迎えに行きます……。」

容作は眼をしばたたくことで、涙を落すまいと努力したが無駄だった。火のつくほど泣く子供の声をあとに、彼は『迎え』の自動車の待っている電車通りまで、歩かねばならなかった。板塀の中から、背のびをして見ている人もあった。角々には、私服が一人ずつ立っていた。容作はそれによって、当局が如何にものものしい警戒をしているか、今更驚いた。かつてない打撃のうちにも、いくらか判断してみることが出来た。——

中学で同窓だった房森が、ロシアに行って何をして来たか、容作はほとんど知らなかった。しかし、房森が社会運動家であることは、世間周知の事実である。房森は何か国法に触れるようなことを、たくらんだのだろうか。いずれにしても、房森は一方の旗頭であった。そういう運動家の常として、彼はいつも護身用の武器を持っていた。当局は、房森が先月大阪へ発ったとも知らず、どこからか、まだ自分の家の二階に居ると聞き込み、それで今日大挙して襲ったのだろう。なにしろ闖入して来た刑事達は、みなあおざめて決死の色を表し、手にピストルを持つのさえいた。ところが、二階でつかまったのは、大ものの房森でなくて、麻口であった。麻口がくくりあげられて、階下におろされた時、一人の刑事が背広にいった。

「この野郎が、ここに潜伏しとるとは思わなかったです。自分は房森が飛びおりるとばかり思って、裏の軒下で待っとったら、こいつがぴょこんと、トタン屋根に逃げだして来た。本庁へ二三度来た奴ですから、——なんだ、お前、麻口じゃないか——と階下からどなってやったです。自分に名前を知られとるので、びっくりして観念しやがったんです。だが、房森の弟子ですからやっぱりこの野郎兇悪な奴ですよ。」

で、容作は罪もない自分が、こんな目にあうわけを、次第に判断しながら麻口と向き合って、三人の刑事に挟まれ、宵闇の自動車に乗せられた。

四

市枝は、そうして捕縄をかけられた夫に、ほとんど口をきくことすら許されず、いきなり連れて行かれると、今ま

で極度の興奮で、やっと支えていた身体が、夫を送りだした二畳の玄関に、そのままずれゆるんでしまった。彼女は、役人達の土足で、ざらざらした畳の上に、力なくべたりと座り、震える膝に進を抱きあげながら、何とか泣きやませようと乳をくわえさせた。だが、乳房は、進と同じような、彼女自身のしゃくり泣きで、たびたび子供の口を外れそうになった。

「奥さん、ちょっと家の中を見せてもらうよ。」

なるほど、そういう言葉が、家宅捜索を意味することを、彼女は始めて知った。彼等は、これほどの悲しみに打ちのめされている母子とは、何の連鎖もない冷めたい態度で、押入の襖を全部外し、布団から行李から、箪笥、長火鉢の小抽斗に至るまで、あらいざらい探し回った。市枝は、夫の長い失業苦でほとんど空になった箪笥や、分厚な質屋の通帳を引っぱりだされると、直接自分の身を裸体にされるほど恥かしかった。

「本箱の抽斗のかぎをかしたまえ。」

そういわれて、彼女はちょっとはっとした。その抽斗には、夫が以前から大切に保存していたぬめ表紙の浮世絵本があったのだ。だが、それも失業苦から、夫が金にかえてしまったと気づくと、彼女はこの上の恥かしさから、ほっと免れた気がした。

市枝は、罪もない夫に、深い難題のかかるような証拠品が……出るはずはないと思ったが……何一つ出てくれないことを祈りながらはらはらして、泥靴に荒された畳の上や、役人の手先をそっと見ていた。なぜか、ひどく靴ずみのにおいがしていた。

彼女は、無情に夫を引っ立て、尚も執念深く、家宅捜索を続けている役人達を、ひそかに憎まずにはいられなかった。市枝の突差の恐怖は時がたつにつれ、何か強い憤怒にかわっていった。

悪いことといっては、他人の悪口一つ言えないような温順しい夫に、その夫の生身に縄をかけた、まずそれが無性に腹立たしい。しかし、何かの誤解で、一時夫を縛ったことは、彼等の役目がら、かりに、がまんするとしても、市枝は、その態度はがまんすることが出来なかった。さきほど、いくら彼女が哀願しても、彼等は更に眼の色を動かさなかった、どころか、却て勿体ぶった侮蔑を用意していたように見られた。憐憫を知らない人々、市枝はこんな場合、これほど無情でいられる人々を、寧ろ不思議に思った。彼女は以前から、こういう人間を見たことは稀だった。同じ人間にも、こんな非人情な人間のいることを、今まで殆ん

ど忘れていた。

役人達は、天井をこつこつ箒の柄でたたいて見たり、日の暮れた床下に潜りこんで、顔中蜘蛛の巣をはって出て来たり、とにかく、二階から階下へと、二時間あまり捜索して、二階の麻口の持物を沢山、サイド・カアにのせていった。

その時、がらがらと台所のガラス戸を開け、狭いたたきに身体をいれたのは、消費組合の家村であった。

「奥さん、何かあったんですか。」

労働服を着て鳥打をかぶった彼が、市枝に声をかけた瞬間、何かまだ獲物があると張り込んでいた刑事が、すばやく家村の頭の上に突っ立った。

「まあ、君かけたまえ。」

家村の姿で、ただの御用聞きでないとにらんだ刑事は、もう、ガラス戸に手をかけて、家村を逃がさない用心をした。

「この方、消費組合の配達をしてる人ですから、何でもありませんよ。」

さっきから、腹立たしくてたまらない市枝は、人さえ見れば罪人と見たがる刑事に、始めて強く、一言そういった。だが刑事は、家村の背後のガラス戸をしめてしまった。

五

家村はすぐ、その直感で、官憲の手により、この家で、何が行われたかを見てとると、ちょっと、とぼけたように刑事を見あげた。

「……僕は消費組合のもんだ。配達に来たんですよ。」

「何じゃ、商事組合？　商事組合のものが、日の暮れた今頃、裏口から、こっそりくるはずがないぞ。」

「商事組合じゃない、消費組合ですよ。消費組合っていうのは……」と家村は思わず噴きだしながら、ちょっと説明した。しかし、山陰辺の訛りのある刑事は、まだ消費組合というものを知らないのか、てんから家村を疑ってかかった。家村はこれまで、芝浦の鉄工所で働いていたが、そこの罷業の時、目的貫徹の為少し薬をきかせ過ぎて、ちょっとしたおたずねものになった。所管署の追跡がうるさいので、今暫くこちらに身を避けて消費組合に働いていた。

「そんな言葉は、いつもお前達の手じゃ、お前この家へ連絡に来たのじゃろう。とにかく署まで来てもらおう。」

刑事はおっかぶせた。家村ははっと、消費組合の説明で、刑事が侮辱を感じ、尚腹を立てたのだと思った。彼は無論

侮蔑する気ではなかったが、運動家の常として、こんなあられもない家宅捜索のあとを、眼のあたり見ると、全くその事情を知らなくても、本能的に弱い方に味方する。それがつい、反感となって表れたのである。

「冗談じゃない。僕にゃあ今、引っぱられてるひまなんかないよ。何しろ配達が忙しくて……」

家村が今度は昂然といいかけた。

「何じゃ、ひまがない？　生意気ぬかすか……」

がちゃんとガラス戸に、刑事は家村を突き飛ばした。市枝は見かねて、

「何をなさるんです！」と警官に言い、家村に「あなたは配給品を自転車に積んでらっしゃるんでしょう。これほど疑われるなら、自転車をここへ持って来て、現品を見ておもらいなさいな。」

彼女も重なる憎みと反感で、心から家村に同情した。その声を聞いて、奥の部屋にいた同じような張り込みの警官が、三人出て来たが、

「生意気な野郎だ。怪しいもんだよ。連れてけ！　連れてけ！」といって、家村の自転車など調べようともしなかった。

「だって、そりゃああんまりですわ。まだお夕飯も食べず、組合の配達を待ってる家もあるでしょう。その人を引っぱるなんて。」

市枝は眉を下げ、苦い顔をして当然家村を弁護した。

「そんなに引っぱりたきゃあ、配達が済んで行ってあげらあ。」

家村も興奮した口調で、断然拒んだが、その刑事と一人の制服が、彼を暗い戸外に連れだした。おもてで争う声と、ぴしゃり、ぴしゃり、頬の鳴る音がした。市枝はぎりぎり歯を食いしばって、その音を聞いていた。——

まだ、松のうちのことだった。正月になって始めて銭湯に行った市枝が、進をおんぶして帰ってくると、台所にひょっこり、消費組合の青年がのぞいた。何だか、いつもくる人とは違っていた。

「これから僕が、御用を聞きに回りますから、どうぞよろしく。」

市枝はそういう青年の顔を見て、驚いて訊いた。青年も意外な眼をして、太い顎に笑皺をよせたまま、暫く市枝の顔から眼を離し得なかった。二人は足利の町で、幼友達であった。市枝は家村の店先につるした中将湯の看板を、すぐ思いだした。そのお姫様の前で、大勢で鬼ごっこをしたものだった……。無論、小学校も同じだった……。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com